

全国大会開催地からのご挨拶 ～第48回開催にあたって～



春日井市教育委員会教育長 水田 博和

第48回全日本教育工学研究協議会全国大会が、多くの関係者の方々のご尽力により、愛知県春日井市で盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

春日井市は、名古屋都市圏の北東部に位置し、利便性の高い広域交通を活かした良好な都市環境と豊かな自然環境が調和したライフタウンとして、人口31万人を超える中堅都市に発展しました。令和5年には市政80周年を迎え、誰もが暮らしやすさと幸せを実感することができるよう、「子はかすがい、子育ては春日井」を掲げ、教育に力を入れています。

さて、本市では約20年前から「教育の情報化」に取り組んでまいりました。校務改善にICTを活用することで、まずは教職員がその便利さを体験することからスタートしました。10年前からは分かりやすい授業の実現をめざし、学習規律の徹底と実物投影機などのICTの日常的な有効活用に取り組みました。そして、その成果を「かすがいスタンダード」として市内全校に水平展開してきました。「便利さの実感」を大切に、いつでも気軽にICTが使えるように環境を整えること、有効な活用の仕方を共有することで、市内小中学校での日常的な活用が広がりました。

GIGAスクール構想による1人1台端末の導入に際しても、これまでの20年の取組と同じように、まずは教職員が使ってみてその便利さを実感し、活用のイメージを広げていくことから始めました。ただ、クラウドの活用という今までの教育現場では未知のものを授業に取り入れることに、教職員はもちろん、児童生徒・保護者にも大きな戸惑いや不安があったことは、本市においても例外ではありませんでした。しかし、「まずはやってみる」ことで、簡単な実践の中にも新しい発見や感動を見つけ、それを共有していくことで活用が広がっていることを実感しています。

春日井市は平安時代の三跡の一人である小野道風の生誕の地であると言われていています。小野道風といえば、柳に跳びつく蛙の姿から「何事もあきらめずに努力すれば、成し遂げることができる」ということを悟ったという話を思い出す方が多いのではないのでしょうか。1人1台端末の導入にも、たくさんの「トライ&エラー」があり、今に至っています。

予測不可能とされる未来を生きる子どもたちが、生涯にわたり自分で学び続ける力を身につけるために、教師もあきらめず挑戦していくことが重要です。これからも、日々実践に取り組んでいきたいと考えておりますので、参加される皆様から忌憚のないご意見をぜひお聞かせいただきたいと思います。

コロナ禍でオンライン開催であった第46・47回大会から3年ぶりに、本大会が対面での開催となり、春日井の子どもたちの姿を皆様に実際にご覧いただけることを心待ちにしております。

最後に、本大会のご成功と皆様のご健勝、ご活躍を心から祈念いたしまして、挨拶いたします。

2022

vol.2

発行日 2022年8月10日
発行所 日本教育工学協会
発行人 高橋 純
制作協力 株式会社帆風
事務局
〒107-0052
東京都港区赤坂1-9-13
三会堂ビル8階
TEL: 03-5575-0871
FAX: 03-5575-5366
<https://jaet.jp>

今年度の全国大会は、愛知県春日井市で開催します

日本教育工学協会事務局

第48回全日本教育工学研究協議会全国大会は、愛知県春日井市にて現地開催いたします。開催概要は以下の通りです。

テーマ：GIGAスクール環境の日常的な活用で実現する令和の学び

開催日：2022年10月28日(金)～29日(土)

会場：春日井市民会館（春日井市鳥居松町5-44）
文化フォーラム春日井（春日井市鳥居松町5-44）
春日井商工会議所（春日井市鳥居松町5-45）

公開授業：春日井市立勝川小学校(学校情報化優良校)
春日井市立藤山台小学校(学校情報化優良校)
春日井市立出川小学校(学校情報化先進校)
春日井市立坂下中学校(学校情報化優良校)
春日井市立藤山台中学校(学校情報化優良校)
春日井市立高森台中学校(学校情報化優良校)

また、大会二日間のプログラムは、以下を予定(*)しております。

【10月28日(金)】

午前中 公開授業（※開始と終了時間は各学校により異なります。）

13:30～14:00 開会式
会長挨拶／来賓挨拶
学校情報化先進校表彰式

14:15～15:00 基調講演 東北大学大学院 教授
堀田 龍也 先生

15:00～15:15 企業製品紹介・休憩

15:15～16:45 セッション1

「GIGAスクール環境の日常的な活用で実現する令和の学び～公開校6校の実践から学ぶ～」

勝川小学校：泰山 裕（鳴門教育大学）

藤山台小学校：三井 一希（山梨大学）

出川小学校：佐藤 和紀（信州大学）

坂下中学校：登本 洋子（東京学芸大）

藤山台中学校：玉置 崇（岐阜聖徳学園大学）

高森台中学校：高橋 純（JAET会長、東京学芸大学）

【10月29日(土)】

9:00～12:00 研究発表、ワークショップ（1）

13:00～14:45 研究発表、ワークショップ（2）

14:45～15:00 企業製品紹介・休憩

15:00～16:30 セッション2

若手教員が語り合う「GIGAスクール環境の日常的な活用で実現する令和の学び」

コーディネータ：高橋 純（JAET会長、東京学芸大学）

登壇者：春日井市内の若手教員

16:30～16:45 閉会行事

初日午前中は、参加者は各公開授業校で、授業をご覧いただき学校内研究協議会に出席します。その後、大会会場へ移動して午後の開会行事に参加することになります。セッション1では、各公開授業校の実践を受けて、それぞれの指導研究者がディスカッションを行い、公開授業校の取組から学びます。セッション2では、指導研究者のコーディネートのもと、大会開催地の愛知県春日井市の若手教員に、GIGAスクール環境を日常的に活用するうえでの気づきや工夫点などをトークセッションとして、参加者と共有していきます。

また、教育現場のICT活用に役立つ最新の製品や

サービス、教材などに直接触れたり、より深く知ったりできるワークショップも協賛企業や団体により開催されます。

*最新の大会プログラムや時間は、愛知・春日井大会ホームページをご覧ください。



<https://conv.jaet.jp/2022/>

「学校情報化認定」優良校認定への申請



学校情報化認定委員会副委員長／信州大学 准教授 佐藤 和紀

1. 学校情報化認定とは

改めて、日本教育工学協会（JAET）が進めている学校情報化認定について説明します。JAETは、教育の情報化の推進を支援するために、学校情報化診断システムを活用して、情報化の状況を自己評価し、総合的に情報化を進めた学校（小学校、中学校、高等学校）を認定する学校情報化認定に2014年度から取り組んでいます。「情報化の推進体制」を整え、「教科指導におけるICT活用」「情報教育」「校務の情報化」に積極的に取り組んでいる学校を称え、学校情報化優良校として認定します。そして、学校情報化優良校が一定以上の割合になった地域を学校情報化先進地域として認定します。

学校情報化診断システムに登録すると、全国の学校との比較や、既に優良校の認定を受けた学校の申請内容（エビデンス）を参照することが可能となります。前回のニュースレター 139号では、学校情報化認定委員会委員長／中村学園大学の山本先生から、認定実績が示されています。学校情報化優良校は現在1618校となっており、GIGAスクール構想によって申請数は増え、特に年度末の申請が多い状況が続いています。

2. 優良校の申請について

優良校に申請する場合、1) 学校情報化診断システムへのユーザー登録、2) 学校情報化診断システム（チェックリスト）による自己評価、3) 学校情報化認定優良校認定基準のチェック、4) エビデンスの入力と申請、5) 学校情報化認定委員会の審査、という手続きになっています。

1) 学校情報化診断システムへのユーザー登録の段階では、学校アドレス等でユーザー登録を行います。この際、代表メールをおすすめします。よくある問い合わせの中には、「担当が異動してパスワードが分からず再申請ができません」というものがあります。登録後も、引き継ぎができる体制を整えていただきますようお願いいたします。

2) 学校情報化診断システム（チェックリスト）による自己評価、3) 学校情報化認定優良校認定基準のチェックの段階では、担当のみで行うのではな

く、全教員で、何ができて何ができていないかをぜひ、共有・議論してください。申請や認定が目的ではなく、よりよい学校情報化を構築していくための取組です。担当だけが知っている制度にはならないよう、学校全体でチェックしていきましょう。

4) エビデンスの入力と申請の段階では、基本情報（児童生徒数等）、学校基本情報、普通教室のICT環境、学習者用端末、コンテンツ等の入力、教師のICT活用による指導場面（異なる教師・教科のものを3場面）、児童生徒のICT活用による学習場面（異なる授業3場面）、普通教室のICT環境、PC教室のICT環境（任意）、情報化の取組の特色（任意）、資料（学校全体の情報化の状況、情報活用能力や情報モラル、情報機器の操作スキルに関する指導計画等のファイル、学校の情報化の特色ある取組に関する資料ファイル）の入力をします。

特に、指導計画は情報活用能力を示したもののなか、情報モラルのみなのか、情報機器の操作スキルに関する内容のみなのか、この取り扱いによって、認定者の判定が分かれるところです。また、教育委員会から申請のために入力を求められ、学校名のみを変更するケースも見受けられます。

重要なことは、情報活用能力を育成するためのカリキュラムマネジメントを教員全体で考える機会が作られることです。全体で取り組もうとすれば、もちろん一手間二手間かかってしまうものですが、担当のみで進めれば、名前だけの優良校となってしまいます。ぜひ、持続可能な取組ができる優良校を目指していただければ幸いです。

学校情報化認定 優良校紹介

「まずは使ってみる」から「効果的な活用」へ

春日井市立松原小学校 教務主任 石原 浩一



1. 本校の概要

本校は、全校児童数543名、22学級の中規模校です。現在、全児童にChromebookが春日井市より貸与され、日々活用しています。優良校に認定いただいた令和3、4年度の本校の様子を報告します。

2. 本校の日常

本校職員の朝は、ClassroomとChatを確認することから始まります。Classroomでは、日々の連絡や職員会議等の資料を共有し、Chatでは出欠席や早退、登校状況等のやり取りを行っています。

集会や学校行事は、オンライン化が進みました。陸上記録会の表彰式を近隣の学校と繋いで合同で行ったり、オンラインで工場見学に参加したりすることも当たり前となってきました。令和2、3年度は授業参観を行うことができなかったため、年間数回、各学級で「学校生活の様子動画」を撮影・編集し、連絡アプリを通して保護者に公開しました。

今年度より、2～6年生の児童はChromebookの持ち帰りをほぼ毎日行っています。家庭では、指示された課題に加え、AIドリルやタイピング練習、学習動画の視聴、日記、プログラミング等、個々の課題や興味に即した学習に、学年に応じて取り組んでいます。持ち帰りに際しては、可能な限り学校に他の用具を置いておくようにし、児童の身体的負担の軽減にも留意しています。諸事情により一定期間登校できない児童に対する ClassroomやMeetを使った学習面と精神面の支援も定着してきました。

3. 本校の実践研究

本校では、児童が端末を「対話の道具」として活用しながら、対話を通して学びを深めていけるような学習の在り方について実践研究を進め



写真1 端末を活用した協議会とJamboard

ています。

(1) 外部講師の招聘と授業研究会

昨年度より、外部講師を年間数回招聘し、指導をいただいています。また、コロナ禍で全教員が1つの教室に入ることが難しくなったため、授業動画を用いた授業研究にも取り組みました。全体会では、教員も端末を「対話の道具」として活用しながら協議を進めています（写真1）。

(2) 部会の組織

ICT推進部会と授業研究部会の2部会を組織し、研究を進めています。ICT推進部会では、本校版の「情報活用能力体系表」や「端末活用時の約束」を整理し、学校全体に提案しています。

(3) データによる成果と課題の可視化

学習規律、端末メディア活用、対話と深い学び、学



図1 令和3年度末のアンケート結果 (一部)

びに向かう力という4つのカテゴリーのアンケートを定期的に児童に実施し、その結果をもとに研究の方向性を修正しています（図1）。

4. 最近の様子と今後の展望

本校の端末活用はバラエティ豊かです。給食準備を無言でするた



写真2 対話をしながら学ぶ児童

めに係が作曲した音で配膳列を知らせる学級、体育の実技の出来具合をデータ入力して考察する授業等、各教室で担任の先生のアイデアの素晴らしさに驚くことが多々あります。そのような豊かなアイデアを学校全体に広げ、組み合わせたり一般化させたりする中で「まずは使ってみる」段階から、「効果的に使う」段階へと徐々に移行していきたいと考えています。

学校情報化認定 優良校紹介

自律した学習者をめざして～プロジェクトみなみの取り組み～



六ヶ所村立南小学校 校長 野坂 佳孝

1. 湖のほとりの丘の上にたつ南小学校

青森県下北半島に位置する本校は令和5年度「日本工学教育協議会全国大会青森大会」の授業公開校



写真1 自然豊かな環境にある南小学校

に指定されています。校舎は小川原湖の丘の上にたつ開校10年目の学校です

(写真1)。

2. 情報活用能力育成の取り組み

六ヶ所村は村全体が「学校情報化先進地域」となり、「情報活用能力育成の取り組み」「学校におけるタブレット端末の活用」「Google Workspaceの活用」を中心に教育活動を進めています。日常の授業での活用に加え、毎年「GIGAスクール特別講座」に参加したり、村独自で開催している「東北大学出前授業」に参加したりして、宇宙飛行士や大学の先生と学習する機会も設定しています。また、PTA親子行事では



写真2 親子星空観察会

タブレット端末に星座観察アプリを入れて、「親子星空観察会」を開催もしています

(写真2)。

3. 「プロジェクトみなみ」の実践

本校の教育目標は「自ら問いを立てる自律した学習者をめざして！かしこく・やさしく・たくましく」です。その具現化のために「プロジェクトみなみ」があります。これを受けて6年生は総合的な学習の時間に「六ヶ所村の良さを紹介するパンフレットをつくろう」をめあてとした学習に取り組んでくれました。

プロジェクトみなみ

み みつけよう 友だちの良さ ふるさとの宝物

自ら問いを立てる自律した学習者、良いところ探しができる

な なかまと共に とりくもう

協働的な学習、探究心、思考力、判断力、企画力、実践力

み みんなへわかりやすく伝えよう

表現力、ICT活用、プレゼンテーション能力向上&コミュニケーション能力の育成

村内のエネルギー施設見学、郷土館出張ミュージアム参加等、1学期に取り組んだ学習をもとに、夏休み中も継続して調べ、コロナ禍においてもリモート学習に取り組み、各自が調べてきた内容をまとめ、10月には修学旅行先で「ふるさとの良さをわかりやすく伝えるパンフレット」を完成させて、配付することができたのです。

4. 情報活用能力向上アドバイザー

今年度は、トルコ共和国の小学校とSDGsをテーマにして、エネルギーについて調べ学習したことを交流し、学習内容を意味付けながら「共同制作の絵」に表現する国際協働学習もスタートしました。課題を見付け、その解決方法を考え、折り合いをつけながら取り組みを進める本校の子供たちの姿に、様々な課題に直面するこの現代社会において、「自ら問いを立てる自律した学習者」の育成の重要性を改めて感じています。そのために、桃山学院教育大学の木村明憲先生をアドバイザーとして校内研究に取り組んできました。リモート校内研修会や実際に来校して頂き、子供たちへ直接指導する場面を教職員が見



写真3 木村明憲先生との学習会

せていただく研修会も開催しています。来年度の青森大会がゴールでは無く、そこがスタートと考えて実践を積み重ねております(写真3)。

開催報告

GIGAスクール環境をフル活用した学び



JAET副会長／春日井市立高森台中学校 校長 水谷 年孝

1. セミナーの概要

2022年2月5日（土）に「教育の情報化」実践セミナー 2022 in春日井がオンライン開催されました。このセミナーは、2022年度全日本教育工学研究協会全国大会 愛知・春日井大会のプレ大会としての位置づけです。愛知県春日井市の小中学校では、GIGAスクール構想によって整備された1人1台端末とクラウド環境をフル活用することで、授業のみならず、学校経営や教員研修も改善しています。授業では、子ども一人一人の様子がつかみやすくなるとともに、子ども同士の対話が増えるなど、手ごたえを感じています。校務でも、日常の先生同士の情報交換での活用が活発に行われています。その基礎には、校務の情報化を起点に日常的なICT活用を段階的に進めてきたことがあります。

このセミナーでは、すべての公開校から実践状況を報告してもらい、公開校の指導をしていただいているすべての研究者とともにGIGAスクール環境を活用した学びについて議論を深めました。また、GIGAスクール構想の本格実施に役立つ製品やサービスについて、4つの企業から紹介もありました。以下、6校の実践状況を報告します。

2. 春日井市立勝川小学校の実践から

勝川小では、学びの土台となる学習環境を整え、進展著しい情報化社会に対応し、将来、未知の課題に直面する子どもたちに必要な生きる力の育成を目指しています。課題解決に必要な知識・技能を確実に



写真1 勝川小の授業実践から

に習得させ、それをもとにみんなで思考・判断・表現し合う活用の授業に日常的に取り組むこととしました。まず、すべての教職員が校務に日常的にクラウドを活用することで、使い方に慣れ、その便利さを実感しました。次に授業では、授業のねらいを明確にした上で、学習課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現という学習過程を意識した授業づくりを構築し、子どもたちの探究の支援へつながるようにICTを道具として活用しています。今後も、これまでの授業づくりを継続実践し、日常的に授業改善を一步ずつ進めていくことにより、児童が自ら学び合う学習集団へと高まることを期待しています。

3. 春日井市立藤山台小学校の実践から

藤山台小は、令和元年度に学習指導の研究を開始しました。「学習規律の周知・徹底」「ICTの活用」「マグネットボードの活用」を学習を支える3つの土台として日常授業の改善に取り組み、校内研究の基盤となっています。現在は、今回のGIGAスクール構想におけるクラウド活用を通して、新しい学びのスタイルができつつあります。子どもたちが自分で学習過程を使い、基本となる見方・考え方を働かせながら主体的に課題に取り組み始めています。ここでは、令和元年度から取り組んできた3つを基盤とした上で、クラウドが主体的な学びを助ける役目を果たしています。今後は、そのスタイルの確立に向け、ク



写真2 藤山台小の授業実践から

クラウド活用の実践をより一層進めていきます。さらに、新しい学びのスタイルには、教師と子ども、子ども同士の間関係が新たな基盤として重要であると考え、本年度からは人間関係づくりにも力を入れて取り組んでいます。子どもたちが協働しながら、自らの課題を解決するために学びに向かっていく姿がみられるようになってきています。

4. 春日井市立出川小学校の実践から

出川小での授業におけるICT活用は、平成23年度を皮切りに始まりました。その当時は、実物投影機とプロジェクターを有効活用し、見せたい資料を大きく映す「MAX拡大」、繰り返しや前時の学びの確認で「フラッシュ型教材」などを学習過程の中でどこに位置づけると有効に活用することができるのか、さらには、教えたい学習内容や知識・技能を効率よく定着させることができるのかを試行錯誤しながら日々の授業改善に取り組んできました。

そしてクラウド環境下で学習端末を活用する授業になったことで、従来の授業ではできなかったことを学習端末や環境が拡張してくれるようになりました。一方で、教師の教え方も教師のタイミングで教える授業から、児童のタイミングで学ぶ授業へ転換しつつあります。写真3では、2年生の児童が「冬を感じる言葉集め」をしています。活動が始まると、児童は特に指示をされなくても他の友達がまとめたシートを参考にしてどんどん言葉を増やしていきます。児童は適切な環境にあれば、自らその環境に関り、児童のタイミングで学んでいくことができるようになっていきます。



写真3 出川小の授業実践から

5. 春日井市立坂下中学校の実践から

坂下中でのICT活用に関するキーワードは「楽し

く活用、有効に活用、将来に役立つPC・クラウド活用」です。これらは日ごろの授業や生徒会活動など、学校生活全般で「日常的」に活用されることで、より効果的に活用されていくという考え方です。

その中で、1人1台端末の活用について坂下中がまず行ったのは、近隣の先進校の取組を真似することでした。ここでも「日常的に活用できるか」ということを第一に考え、真似をしてみて良かったもの、効果のあったものだけを残しながら、少しずつ学校全体でICT活用を浸透させていきました。例えば、先進校で行われていたクラウド活用のアイデアを知り、音楽の「鑑賞の学習で曲をクラウドに入れておけば、生徒は何度でも聴きたい部分が聴けるのでは」として取り組んでみたところ、個別の学びにつながる姿があり、手応えを感じることができました。

本校が目指す山（目標とする活用の姿）は決して高くはありません。みんなで何度も繰り返し低い山を登ることで、少しずつ学校全体としての力をつけているところです。



写真4 坂下中の授業実践から

6. 春日井市立藤山台中学校の実践から

藤山台中では、「自分のもっている知識や技能を組み合わせて、対話的な活動を通して考えを広げたり深めたりすることで、目的達成に近づくことができる生徒の育成」のテーマ実現に向けて、ICTの有効活用に取り組んできました。

まずは、教員の「日常活用」を進めるため、定期的なアンケートを行い、困り感や実践の様子を共有し合うことから始めました。生徒には「1人1台端末を開けばそこは学校」を合言葉に公的な使い方を意識づけ、生徒自身による端末活用のルールづくりをさせました。また全校一斉の情報モラル学習を行

うことで、定期的に自身の端末活用について振り返りを行わせています。

ICTの効果的な活用が進むにつれ、対話的な活動が容易になり、生徒同士が協働して課題解決に取り組む場面が増えてきました。こういった生徒の主体的な態度を引き出すことで、考えを広げたり深めたりする活動を充実させ、課題や問題を自分なりに解決していく力を育てています。



写真5 藤山台中の授業実践から

とが授業におけるクラウド環境の活用の前提です。生徒が活用する前に、クラウドを活用した業務改善を次々に行ってきました。その便利さの実感が授業での活用につながりました。

④ 情報活用能力の育成

アウトプットの質を上げることが次の目標です。そのためには、生徒の情報活用能力を育て、発揮させることが重要です。どのような場面でどのような力を育てればよいかを整理し、実践することが今後の課題です。



写真6 高森台中の授業実践から

7. 春日井市立高森台中学校の実践から

高森台中では、現行の学習指導要領を具現化させるために、GIGAスクール環境を活用して、様々な工夫を行っています。

① アウトプット場面の増加

生徒のアウトプット場面を増やしました。その支えとなっているものが、1人1台端末とクラウド環境です。生徒は、GoogleドキュメントやGoogleスライドに自分の伝えたいことをまとめます。実験結果などはGoogleスプレッドシートに記録して考察しています。どのソフトもクラウド上で情報共有できるので、学級内で常につながりながら学ぶことができます。

② 個別最適な学びの広がり

ICTの活用によって、生徒が選ぶことができる学習方法の選択肢が増えました。さらに、クラウドでの情報共有により、教師は生徒の様子がよく把握できるようになりました。写真6のように、机間指導する際も教師は端末を持って、生徒のつまずきをいち早くひろって、サポートに入ることができるようになりました。

③ 原点は教師自身のクラウド活用

教師自身がクラウド環境のよさを体感しているこ

8. おわりに

セミナーの冒頭では、本市のこれまでの教育の情報化のあゆみを説明しました。スモールステップでの積み重ねが、現在のGIGA環境の活用の基礎となっています。

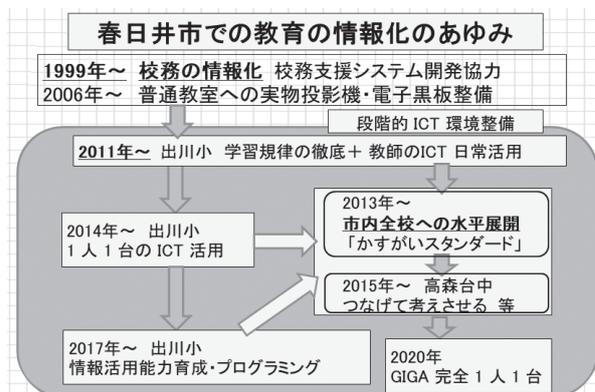


図1 春日井市での教育の情報化のあゆみ

学びの冒険者と学びの旅を楽しむ



札幌国際大学 准教授 安井 政樹

1. ICT活用を当たり前

皆さんは、毎日の生活で「スマホ活用」をしていますか？メールやLINEでのコミュニケーション、SNSでの情報収集や発信、写真で記録、インターネットの辞書的な活用など様々に使っているでしょう。しかし、当たり前のように使うので「スマホ活用」などと言わないのです。学校でも「鉛筆活用」「板書活用」とは、あまり言いません。それは、当たり前に浸透しているからです。「ICT活用」と言わなくてもよい未来が、早く来ることを願います。

2. 学びの冒険者になれるかどうか

「未知という名の船にのり 希望という名の地図を見て 夢という名のコンパスで 未来を訪ねる冒険者♪」これは『未知という名の船に乗り』（作詞：阿久悠、作曲：小林亜星）の冒頭部分です。30年以上前、私は小学生時代にこの歌に出会い、そして教員時代にも子どもたちと歌ってきました。

変化の激しい時代に、ウェルビーイングに向けてラーニング・コンパスを手にして学ぶ姿と重なります。これは、子どもたちのことだけではありません。私たち大人も「学びの冒険者」であり続けたいのです。大人が学び続け、しなやかに変化していけるか。授業観や子ども観、指導法を更新していけるのか。こうした意識を大切にして、子どもとともに学び続ける「伴走者」になりたいものです。

3. 道具は便利だから使う

電子レンジは便利です。加熱、解凍、オーブンやグリルなどの機能があります。私は、プロックローを鍋で茹でるのではなく、レンジでチンをします。このほうが時短で、栄養もたくさんとれるのです。その上、生まれた時間で何か工夫できたり、別のことに時間を使えたりすることで、さらにウェルビーイングに近づこうとするわけです。

1人1台端末には、様々な機能があります。しかし、使い方を知らなければ、そもそも使えません。使って初めて便利さを感じることができます。しかし、

そのためには慣れが必要な場合も多いのです。

1人1台端末の活用が促進されるように、調べやすいサイトが様々用意されています。こういった情報にもあまり触れていない人を「いかに誘うか」。「そんなの興味ない」と思えば、いつの間にか「流行の歌」を知らなくなるように「これからの教育」も分からなくなってしまうのです。

本稿を読んでいる皆様には、子どもにも大人にも寄り添いながら学びを応援する「伴走者」としての役割が、求められているのではないのでしょうか。

4. 創造・発信を楽しむ

私はこの3月まで小学校2年生の担任でした。「漢字が苦手な人でも、楽しく覚えられるようにできないかな？」と問いかけると「ゲームを作ったらいいかも！」と子どもたちが動き始めます。友達の困り感を解決するためにプログラミングを楽しむ子どもたちの姿が見られました。

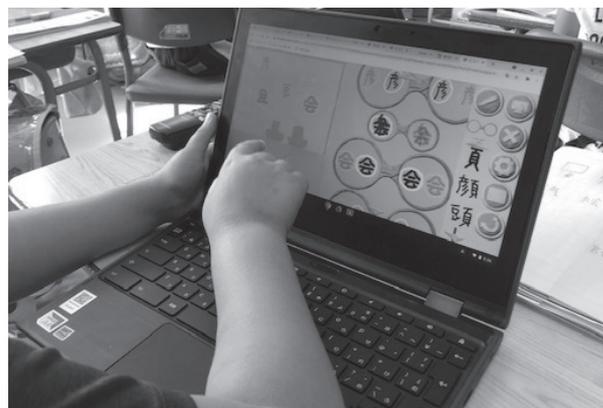


写真1 子どもたちの様子

自らの学びをもとに「創造する」ことや「発信する」ことを楽しむ。子どもたちも先生も楽しみながら、その教育の営み自体を発信しさらに楽しむ。そういった実践が期待されます。社会に開かれた教育課程、STEAM教育などがキーワードになってきます。これが未来に向かう「学びの旅」なのです。

「ちょっと不思議もちょっと疑問もちょっと悩みも訪れる♪」そんな未知なる未来への「学びの旅」を子どもも大人も協働して、楽しみたいですね。

三重県教育工学研究会(MIE-ICT) チーム力で学び、子どもたちによりよい未来を



三重県度会郡度会町教育委員会 教育長 中村 武弘

1. はじめに

本研究会は、どうやって生まれたのでしょうか。

本研究会の前身は、「授業改善をしてよりよい授業を子どもたちにしたい。」という思いの仲間が集まって学びの会をしていました。一緒に会食したり、休みの日などに学校に集まったりして、様々な教育方法や教育機器について話していたのが例会となりました。会として組織的に活動できるようになったのは、当時 暁学園の水谷先生が仲間に加わっていただき、会のメンバーに広がりがあったことも大きな一因です。文部科学省のプロジェクトを受けたりして活動の資金が得られたことにより全国的な研究会やセミナーに参加して、最新の動向を還元できるようにもなりました。

大きな転換は、JAET熊本大会に参加した時に、当時の山西会長から「三重で全国大会をやってみないか」と言われた時でした。「はい!」と快諾をし三重に帰ると、会員は、「よし、がんばろう!」と喜んでくれました。まずはJAET組織の団体会員にならなければとすぐさま行動しました。たった2年で大会の準備ができたのも第32回大会の熊本市と第33回大会の千葉県旭市の関係者の方やJAET本部の全面的な協力をいただいたからだとも今でも会員一同感謝しております。という訳で組織化できた本研究会ですが、良い意味で、周囲の期待を裏切り、現在も存続しております。

2. 通常時の活動「夏・冬セミナー開催など」

例年、年2回のセミナーを夏と冬に100名規模で開催しております。無料で、しかも素敵な講師先生を毎回招聘できること、県内外の教育実践を披露し議論する場を作ることができております。これも、皆様のご支援、ご協力のお陰です。企業様とのコラボで様々なミニ実践を紹介したり、模擬授業を行ったりしています。内容は、授業に役立つ内容や子どもを伸ばす授業や最新の研究成果、教職員研修の事例など授業を改善していこうという趣旨にそって実施しております。

3. コロナ下における活動

コロナ下においては、毎年2回のセミナーは、この2年間中止にしておりました。その間、オンラインの読書会(学習会)を、会員を中心にして月1回程度行っておりました。内容は「スマホ脳」「感動のメカニズム」「自分をコントロールする力」などなどです。毎回、様々なネット会議システムを活用してどれがどのような動作をするのか、操作性や利便性はどうかかなども試しています。

4. 現状と課題(業務形態の変容)



写真1 活動の様子

2006年に20数名で立ち上げた会員は、ほとんどが教諭職で教育実践をすぐに行える形でした。しかし16年以上も経過すると、役職が変化してきています。嬉しいことに会員の過半数が教育委員会関係・指導主事等に就任しております。それぞれの立場で、より良い授業を広げるために頑張っています。ただし、現場で教育実践や研究をしてくれる会員が少なくなったので困っております。

5. 本年度のセミナー宣伝

この2022年度の夏からセミナーをリモートで開始しようと考えております。

日時：2022年8月11日 13:30～16:00

Zoomによる開催詳しくは、

<http://www.mie-ict.com/> のページより



《 第二回「教育の情報化」実践セミナー2022オンライン 企業協賛募集 》

8月27日(土)開催の当会主催の第二回「教育の情報化」実践セミナー2022では、協賛企業を募集しています。プログラムの中に、教育現場で役立つ最新のICT製品やサービスの情報をご紹介いただけるコーナーを設けています。ぜひ、参加されている先生や教育委員会の方に、その特長や活用方法等をご説明したり、質疑応答したりしてご交流ください。

【日 時】 8/27(土) 13:15 ~ 16:45

【形 態】 オンライン開催

【テ マ】 GIGAスクール環境とクラウドを活用した「校務の情報化」による教員の働き方改革

【ご協賛内容】 プログラム内の「企業セッション(1)、(2)」にて、貴社の製品やサービスのご紹介を視聴者との質疑応答含めて、20分間行うことができます。また、コーディネーターを本セミナーご登壇の先生に依頼することができます。各企業セッションでご紹介いただける企業を各回最大2社限定で募集し、合計で最大4社までの受付となります。

【ご協賛金額】 会員企業：20分×1回 2万円、非会員企業：20分×1回 3万円

※上記内容は、やむを得ず内容が変更になる場合がございます。

《 会員募集(個人・団体・賛助)のご案内 》

日本教育工学協会(JAET)は、教育の情報化に取り組んでおられる現場の実践者、研究者、各地域の研究団体や関連企業が参加する研究団体です。会員には、個人会員、団体会員、賛助会員の3つの種別がございます。

まだ、入会されていない先生や団体・企業様がおられましたら、ぜひ入会をご検討ください。

日本教育工学協会(JAET)事務局

〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル

E-mail jaet-office@japet.or.jp

URL <https://jaet.jp>

JAETとは
 ● 全国規模の研究団体として、ICT活用による教育現場の課題解決や、教育現場の活性化に貢献しています。
 ● 教育現場の課題解決や、教育現場の活性化に貢献しています。
 ● 教育現場の課題解決や、教育現場の活性化に貢献しています。

一緒に ICT を活用する
 教育の未来を創りませんか!

JAETの活動
 1. 学校現場の「教育の情報化」の状況や課題について、実践者同士の交流や情報共有を行っています。
 2. 全国規模のイベントを開催し、教育工学研究者や教育実践者から ICT 活用実践事例等の役立つ情報を提供しています。
 3. 教育の情報化に関するテーマを設定し、各地域の活動や実践事例発表を中心としたセミナーを開催しています。
 4. 研究会のイベントやセミナーの開催や、研究会の発展を図るための活動を行っています。
 5. 教育現場の課題解決や、教育現場の活性化に貢献しています。

個人会員
 入会のご案内
 日本教育工学協会
 Japan Association for Educational Technology

つぶやき

先日、四国も梅雨入りしました。これから雨が続くと思うと少し憂鬱になります。今年は平年よりも、8日遅い梅雨入りだそうです。少し気になって調べてみると、この平年というのは、およそ30年分のデータの平均から算出されているとのことでした。そもそも、天気予報自体がそうですが、普段何気なく目にしているいろんな情報の裏に、計り知れないほどの膨大なデータがあることを再認識しました。

私たちが生活していく中で膨大な情報が目の前を通り過ぎていきます。メールは一日何十通とやり取りをしますし、それ以外のコミュニケーションツールの中でもたくさんの情報

がやり取りされています。

GIGAスクール構想が日常化している学校にお邪魔すると、子供たちの周辺にある情報の多さに驚きます。子供たちは常にチャットでコミュニケーションし、ネットから情報を収集し、友達の作業過程も参考にしながら、それを自分の端末上に整理して学んで行きます。

このようなたくさんの情報をやり取りしながら、学びを深めていく経験をした子供たちがこれからの日本を支えていくってくれるんだと感じました。

(Y.T)

編集委員

委員長 原 克彦
 委員 泰山 裕
 〃 長谷川 弘

委員 片岡 義順
 〃 若槻 徹

事務局 渡辺 浩美
 〃 河合 将治
 制作 西島 将範

賛助会員紹介



電子開発学園

大学と専門学校のWスクールでDX推進を担うIT人材を育成

学士 + 高度専門士 + 高等学校教諭 1種免許*

大学
併修
4年制

情報セキュリティ・ゲーム
AI・システム情報・医療情報
+

北海道情報大学 通信教育部

*取得可能な免許:「情報」「商業」「数学」

専門士 + 国家資格を有した即戦力IT人材

専門
課程
3年制
2年制

AI・システム開発
ネットセキュリティ
ゲーム・CG・Webデザイン
医療事務・eビジネス実務

情報処理技術者試験 取得者数

レベル4 ****

情報処理安全確保支援士	92名
データベーススペシャリスト	25名
ネットワークスペシャリスト	4名
エンベデッドシステムスペシャリスト	2名
システムアーキテクト	1名

レベル3 ***

応用情報技術者 283名

レベル2 **

基本情報技術者 2,270名
2021年度在校生実績

「高等教育の修学支援新制度」対象校/文部科学大臣「職業実践専門課程」認定校

電子開発学園

<https://www.edc.ac.jp>

北海道情報専門学校
新潟情報専門学校

名古屋情報メディア専門学校

名古屋医療情報専門学校

大阪情報専門学校

広島情報専門学校

KCS北九州情報専門学校

KCS福岡情報専門学校

KCS大分情報専門学校

KCS鹿児島情報専門学校

生徒にわかりやすさを。 先生に働きやすさを。



プリンターの新領域をひらく

POINT 1
フルカラーで
生徒にわかりやすい。

低コスト
フルカラー
1.47
円/枚*



POINT 2
業務効率アップで
先生が働きやすい。

優れた
高速性
140
枚/分*



学校に笑顔が生まれる、高速カラープリンター

ORPHIS FT

生徒にも先生にも
嬉しい教育環境へ。

↓ 無料資料ダウンロード



*1:A4普通紙片面、RISO FTインクF使用時。カラーは測定画像にISO/IEC24712に定めるパターンを使用し、ISO/IEC24711にないRISO独自の測定方法によって算出。用紙代別。*2:オルフィスFT5430の場合。A4普通紙片面横送り、標準設定連続プリント、本体フェイスダウン排紙トレイ使用時。※写真はオルフィスFT5430にオプションのFWオフセットステーブル排紙トレイとORスキャナーH57000を接続したものです。

理想科学工業株式会社 文教営業部 〒108-8385 東京都港区芝5-34-7 田町センタービル 担当 石井
TEL.03-5441-6674 FAX.03-5441-6614